
神ノ鈴

紳威

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神ノ鈴

【Nコード】

N5617M

【作者名】

紳威

【あらすじ】

神に生まれた三兄弟の話

今日も仲良く喧嘩中！！

設定

設定

神ノ 鈴夜

カミノ リンヤ

神ノの長男

冷静で俺様寄りの性格

だが、弟達がまともでは無いので

兄弟の中では常識人

弟思いの良い兄貴

双子の弟が居る

神ノ 鈴音

カミノ スズネ

神ノの次男

常に敬語で話し、腹黒い

結構、良い性格をしている

弟とは仲が悪くなったりする

しかし、弟とのコンビは最強最悪

鈴夜を弄るのが大好き

以外に兄弟思い・・・かもしれない

双子の兄が居る

神ノ 鈴雨

カミノ レイウ

こちらにも、良い性格の持ち主

常に無表情

興味の無いモノに対してはどうなっても良い様子

鈴音とは仲が悪くなったりする

良く二人で兄を弄り倒す

鈴雨の笑った顔はかなりのレアモノ

二人の兄が居る

姿

鈴夜

黒色の髪に毛先が白い

瞳は緑

右目に眼帯

鈴音

白色の髪に毛先が黒い

瞳は青系

左目に眼帯

鈴雨

灰色の髪

瞳は紫

神獣

シンジユウ

鈴夜

神獣時の名は黒ーコクー

鈴音

神獣時の名は白ーハクー

鈴雨

神獣時の名は灰ーハイー

神獣とは・・・

そのまんま言くと神の獣

小さくなったり大きくなったり出来る

鈴夜達は元々神獣

他の設定

家は神社

巫女服を愛用

なんか悪の組織的なのが出てくる
↑

基本、ギャグ

鈴夜と鈴音は双子

鈴雨は弟

本人達から自己紹介 ←

俺の名は神ノ鈴夜だ

性別は ♂

年は千歳以上。鈴音の双子の兄だ

好きな物は八橋（抹茶）だ

嫌いなものは

猫と弟達の悪戯だ（怒

右目を隠している

性格は管理人曰く

・ ツンデレ

・ 無愛想

・ 冷静

だ、そうだ

では、次は鈴音の番だ

こんにちは

僕の名は神ノ鈴音です

誕生日は3 / 23です。鈴夜と双子なので

鈴夜も同じですよ

性別は♂です。♀と間違われるのにはイラッとしますね（黒笑

年は鈴夜と同じです

好きな物は八橋ニッキと鈴夜弄りでしょうか・・・？

嫌いなものは

猫と・・・否、なんでもないです（黒

僕は左目に眼帯をしています。秘密があるので

性格はDS・腹黒・クールらしいです

続いて、鈴雨の番です

神ノ鈴雨だよ

年は兄さん達の一つ下

誕生日は兄さん達と同じだよ

性別は♂。女顔とか言ったら殺すよ・・・？

好きな物は八橋（硬い奴）と鈴夜兄さん弄り

嫌いなものは猫と鈴音兄さん（黒）

「鈴雨・・・？（黒）」何、兄さん・・・？（黒）」

性格は冷静・ドS・腹黒だつて

ふわぁ・・・眠・・・

設定（後書き）

ブログで連載中の物です

この子達の名前は神社でひらめきました

この子達で小説を作って下さっても結構です
その作品を見てみたいですー・・・なんて考えてます

第一話

昔むかし

在る所に、神ノ神社という所がありました

其処は人の足では到底辿り着けぬ

大変、山奥にありました。

やがて

その神社はいよいよ幻の存在となってしまうました。

人々は其の存在を忘れていきました。

神社の神は思いました

「何と哀れな人間達。我は長い間、主等を見守って居たと云うのに・
・・」

神は深く悲しみました

そして

「此処は子奴等に任せよう。私の代わりに神社を守り続けてくれ」

新たな命に運命を授けました

神は新しい命に名を送りました

一番上の子には鈴夜

次の子には鈴音

最後の子には鈴雨と名づけました。

第二話

神様の新たに創られた三つの命は

長い年月と重ね

すくすくと成長していきました。

一番上の子、鈴夜は言葉を兄弟に教えました。

二番目の子、鈴音は道具の使い方を兄弟に教えました。

三番目の子、鈴雨は地理の事を兄弟に教えました。

それぞれ知識を分け合い、何時しか立派な神の子になっていました。

話は替わりまして

その頃の人間の時間は”江戸”と言う時でした。

毎晩、毎晩、紅いモノが流れました。

争いなんて日常茶飯事の様で、三人の神の子達は悲しみました。

「何て・・・醜い・・・」

「母様の言っただけに本当に哀れです」

「・・・人間なんて興味ないよ」

それぞれ思った事を口にしました。

だけでも、その顔は悲哀な人間達を思う顔でした。

第三話

「鈴音、鈴雨、飯出来たぞ」

「んー先食べてて下さい。私は後から食べますので」

「食欲無い」

最近、兄弟揃って飯を食わない

鈴音は部屋に閉じ籠りっぱなしだ

もう一週間も顔を見ていないような気がする

鈴雨に至っては食欲無いの一点張り

確かに俺等は飯は一ヶ月は食わなくても保つが

アイツの身体が心配だ

「・・・はあ」

こうなったのもアノ時のせいか・・・？

- ^ - ^ - ^ - ^ - ^ - ^ - ^ - ^ - ^ - ^ - ^ - ^

「鈴夜！！！！！！」

一ヶ月前、鈴音が慌てた様子で部屋へ駆け込んで来た

「どうした？そんなに慌てて」

「大変です！！”神ノ鈴”が無いんです！！！」

バタンッ

「それ・・・本当なの？」

鈴雨が部屋に入って来た

「ええ。さつき保管庫の確認へ行ったら、”神ノ鈴”のケース共消えてて・・・」

「ヤバいな・・・」

「鈴音、何か変わった事は無かった？」

「私から見てもかもしれませんが物の位置が若干変わっていました」

「取り敢えず現場へ行こう」

俺の掛け声と共に二人は風になり素早く保管庫へ向かって行った

「鈴音」

「はい。何ですか」

「何か怪しい者は居なかったか？」

「あ、ねえ鈴夜」

鈴雨が何か思い出したかの様に声を上げた

「何だ」

「そついえば昨日、アノ女が来てたよ」

「琰羽か？」

琰羽は神社にたまに来る人間の女だ
最近は顔を合わせないと思って居た

「・・・」

鈴音は黙りこくってる

「琰羽さんが・・・怪しいと思いませんか？」

「は？」「え？」

「最近、様子が可笑しかったんです。どこかソワソワしたり
辺りを警戒したり、気配に敏感でした・・・」

「なるほどね」

確かに確率は0ではない

だが、決まっても無いのに決めつけるのは良くない

「其処までにしとけよ、鈴音、鈴雨」

鈴音と鈴雨は心底驚いたような顔をして

「ふーん鈴夜があの子を庇うなんて・・・ね」

「へーそうですか」

二人は嫌な笑みを浮かべていた

「いい加減にしろ・・・」

こうなった二人を止めることは出来ないと諦めていた

しかし、その後の空気は重く冷たいものになった

”神ノ鈴”を早く見つけ出さなければ

皆の思いは一緒だった

第四話

「鈴夜」

「何だ鈴音」

鈴音は神妙な顔で口を開いた

「私、旅に出ます」

「は？」

「待っていても何も掴めません。」

「だからと言って・・・」

「もう・・・決めましたから。僕の決意は揺らぎません」

鈴音の顔は真剣だった

もう、何を言っても無駄であろうと長年の勘で思った鈴夜は

「分かった。俺も行く」

「鈴雨が一人になります」

「どっちにしても一人になるだろ。お前も」

「ですが・・・」

「それに、アイツは付いて来ると思っぜ」

ストンツと気持ちの良い音が鳴り、襖が開く
そこにはいつもと変わらぬ無表情でいて、少し怒りの感情が入っている

鈴雨だった

「僕も行くに決まってるじゃんか」

鈴夜と鈴音は顔を見合わせて笑った

第五話

「今日は晴天！！絶好の旅日和ですね！！」

こんにちは

鈴雨だよ

鈴音がさ

旅をすると決めた日からかなり機嫌が良いんだ

・・・気持ち悪ッ

「鈴雨？（黒笑）」

・・・何で分かったのかは聞かないよ

「フフフッそれが私の力ですよ」

「ねえ、さっきからなんなの？プライバシーって知ってる？」

「おい、鈴雨今は江戸時代だぞ」

「おっと」

話が反れたね

鈴音には聞こえない様にガードしとかなきゃ

「チッ」

解説しよう

神ノ一家は神だから何でもありなんだよ！

不可能な事でも「だって神だもん」で流そう！！

今、何か聞こえた様な・・・ま、いつか

さて本題だ

何で鈴音は機嫌が良いのか・・・

相変わらずアノ人の事は良く分からないなあ

黒いし
↑

「ところで鈴夜、余り出番ありませんでしたね」

「それを言っな・・・」

・・・

「フッフ管理人は私の事が一番可愛いみたいですし」

「裏事情を言っな。それに管理人は皆平等だってか平等にしないと殺す」

・・・

「なんか本編なんでしょうかこれ」

「俺に聞くな」

・
・
・
な
に
こ
の
グ
ダ
グ
ダ
感

第六話

いよいよ旅にでます。鈴音です！！
まだ出てなかったの？という方はスルーで

「鈴夜、鈴音の頭壊れたみたいだよ」

「本当に失礼な奴ですね・・・断罪しますよ？」

「お前等、俺を挟んで喧嘩するな。うるせえ」

「「黙れ小僧」」

「もう黙れよお前等」

ありやりや

話が脱線しましたね・・・デジャヴ？そんなの知りません
取り敢えず、今回の旅の目的は瑛羽さんを探し出し
ついでに温泉巡りでもしましょうか

と、いう企画です↑

「温泉巡りが本音だよね／だよな」

「当然です。なんであの人の為に私が動かなくちゃいけないんですか」

「・・・本音でたな」

「鈴音、神ノ鈴の事忘れてない？」

・
・
・

「てへ」

「てへ じゃねえよこの馬鹿」

「はあ」

全く・・・人が下手に出てりゃ調子にのりやがって・・・↑
仕方ない私が大人になりましょうか

「ほら、出発しますよ」

「やっとか・・・（疲れた」

「・・・」

では、行きましょうか？

第七話

「で、旅に出たのは良いけど何処良くの？」

「「あ」

「あ、じゃねえよ」

いつもの三人兄弟はいつもの様に言い争っていました
といっても、下らない事なので直ぐに終わります

「とりあえず南へ進んで行くぞ」

「「えー」

「文句あんのか？」

渋々ながらも鈴音と鈴雨は頷き
一向は南へ向かい始めました
そしてまた愚痴を零し出します

「本当に暑いですねえ。太陽は私に喧嘩売っているんでしょうか？」

「そんな筈ないじゃん馬鹿じゃないの」

「なんです・・・」

「うるせえ暑くなるだろ」

「ハッ」

「チッ」

そんな会話を暫く続けていると町が見えて来ました

「何処でしょうか」

「知らない。興味無い」

「はぁ・・・ちょっと聞いて来る」

そう言い残し、鈴夜は町へ消えて行きました

第八話

鈴夜は一人、町の中へ入っていった
中々景気の良さそうな賑やかな町だったので
鈴夜は余り目立たないよう
ふらりと歩いて行った

「おいそこの兄ちゃん!!」

鈴夜は行き成り声を掛けられたことに少し驚いたが
冷静さを保った

「・・・俺か？」

「おうっ」

声を掛けてきたのは
中々体型の良い四十位の男だ

「何だ」

「・・・兄ちゃん、人間じゃないだろ」

「ッ!!」

「はははッ何故ばれたって顔だな」

「貴様・・・何者だ」

「なあにただの八百屋のおっさんよ」

ただの八百屋が人間じゃないかなんて
見抜ける筈がない
只者では無い事は確かだった

「はは、そんなに警戒すんなって」

「警戒しない方が可笑しいだろう」

「そりゃあそーだな」

ちなみにこの男、警戒心というモノが全く無い
へらへらと笑っているだけだ

だが・・・

目は、確かな者だった

第九話

鈴夜は考えた

何故、自分の正体が見破られたのか
少なくとも一般の人間には見えやしない

そう

一般の人間には・・・

しかしこの気配はまさしく人間のものだ
だとしたら・・・

「お前・・・男巫・・・か？」

「ククッ流石だねえ神獣の兄ちゃん」

「まあ正しくは男巫だっただな」

一瞬、男は顔を歪め空を見上げた

「・・・そうか。それで俺に何の様だ？」

「兄ちゃん、誰か捜しているだろう」

そんな事まで知っているのか

鈴夜は一瞬驚いたが

この男は計り知れないことを学びサラリと流した

「ああ・・・瑛羽と言う女だ」

鈴夜は外部に漏れぬ様
なるべく小声で話した

「瑛羽・・・ねえ。その子は人間なのかい？」

「ああ気配は人間だったが、お前みたく巫女かもしれないな」

「巫女だったとしても瑛羽なんて奴は聞いたことねえな」

「そうか・・・」

「だが」

男はそこで一旦区切り、次の言葉を発した

「噂では、聞いたことがあるぞ」

「本当か!？」

「まあ噂だな。・・・聞いていくか？」

「是非、お聞かせ願いたい」

第十話

一方、鈴音&鈴雨は・・・

「姉ちゃん、ちょっとそこの甘味屋にでも行かないかい？」

「俺達と一緒に遊びに行こうぜ」

「いや、俺と行こう！！」

などの数名の男にナンパされていた
勿論彼等はお怒りな訳で

「・・・貴方達、死にたいんですか？」

「・・・殺す・・・」

鈴音は最高に真っ黒い笑顔で

鈴雨は凍るほどの冷たい目で男達を見た

「ひいッ」

「すっすいませんでしたあ」

哀れな男達は一目散に逃げて行つた
その姿はなんと無様だったであろうか・・・

「クスクス・・・醜い姿ですねえ」

「・・・馬鹿みたい」

「それにしても鈴夜、遅いですね」

「知らない」

その時

「鈴音、鈴雨」

家と家の間の暗い道から鈴夜が顔を除かせた

「遅いですよ」

「・・・何か分かったの？」

鈴夜は小さく笑い
口を開いた

「瑛羽について、少しだが情報が入った」

「クスクス・・・流石、と言っておきましょうか」

「へー興味ないけど聞いてあげる」

「アノ女、噂では・・・」

「悪い霊はい」

第十一話

「悪霊らしい」

「ッ!？」

「どういこと？」

「噂だ、男巫から聞いた」

「男巫・・・多少は信用しても良いんですか？」

「腕は確からしい・・・なんとって俺の正体を一目で見抜きやがった」

鈴音と鈴雨は（不本意ながら）顔を見合わせた

「ふーん、じゃあ口だけの男巫じゃないんだね」

「ああ」

鈴音は一人黙りこくって

何か考えている様なその顔を上げた

「結局、悪霊とは・・・どういうことなんですか」

大分話が脱線したが
これが本文なのだ

「あいつはもう、死んでいたらしい」

「どこに証拠が？」

鈴夜は無言で懷から古びた写真を取り出した
そして
二人の前に差し出した

「瑛羽はさっき話した男巫の祖母の知り合いだったらしい」

「これはその時の写真って訳ですか」

「ああ」

「でもさ、この写真の瑛羽、僕たち知ってるよね」

「いや、実際私たちの方が昔から生きていますがね」

「だが瑛羽出会ったのは確か一年前だぞ？」

「ふむ・・・この写真は何十年か前の物・・・確かに霊という説も

ありますが

悪霊かどうかは分かりませんよ？」

それっきり三人揃って黙りこんでしまった

第十二話

結局そのまま夜になり

神ノ兄弟は町を離れ、近くの森で夜を過ごすことにした

「情報量としては十分でしょう」

「謎が深まるばかりだな」

「・・・鈴雨？どうしたんです、黙りこくって・・・」

鈴雨はゴロンと寝転がり空を眺めていた
一言も言わずただひたすらと空を見ていた

「空が・・・凄く綺麗」

鈴雨の発言で難しい顔をしていた
二人が顔を上げた

そして次の瞬間、目を見開き
鈴雨と同じように寝転がり空を眺めた

「本当です・・・まるで星の川ですね」

「ああ、天に星の川が流れている様だな・・・」

「今は難しい事は忘れて星が見たい」

鈴雨の意見に賛成するように

鈴音は柔らかに微笑んだ

「そうですね」

この天に浮かぶ星の川を
天の川と呼ぶようになる

第十二話（後書き）

七夕に書いたものですね・・・

第十三話

目が覚めると

隣で鈴雨と鈴夜が寝息を立てていた

昨日はそのまま寝てしまったのか・・・

でもお蔭で頭がスッキリした気がする

とつと神ノ鈴を取り戻して

黒幕にお仕置きしなくちゃいけませんし・・・ね？

「二人とも、起きて下さい。もう日は高い位置にありますよ」

そう言つて

鈴雨と鈴夜を揺すり起こすと

二人は「んー」など奇声を発して目が覚めた

「・・・もう少し寝かしてよ」

「クスクス、折角優しく起こしたのに・・・

今度から起こす時は足元から火で炙っていきましょうか？」

「鈴音、止める。全くお前は未恐ろしいな」

「お褒め頂き光栄です」

後ろから褒めて無いぞ、と聞こえるのはこの際無視です
そろそろ情報も入ったし次の土地に行きたいんですが・・・

「何だらだら準備してるんですか。早く行きますよ」

少し声のトーンを落として言ってみても効果は無し
…慣れでしょうかね？

「あー、腹減った。鈴雨、食いもん持ってきて来い」

「嫌だよ。自分で取ってきてきな」

「早く行きますよ？」

第十四話

あの後こっぴどく鈴音に怒られ
渋々といった様子で準備を万全にし
その場を去りました

「活気溢れる町でしたね」

「そうだな、情報も手に入ったし。あの男巫に感謝だ」

そんな二人の会話を退屈そうに鈴雨は聞いていました
実際、神ノ鈴さえ手元に戻れば黒幕なんてどうでも良かったのです

「早く帰りたいな」

そう、空に向かって呟きました

一行は森を抜ける為にどんどん奥へ進んで行きました
森の奥は昼間なのに薄暗く、視界が霞んで見えたのです
しかし早く森から出なければなりません
この森は奥に進めば進むほど、危険が増えるのです
その一つが、森に住む化け物でした

「風の噂では、此処には化け物が出るらしいです」

「ほう・・・特徴は分かるか？」

「ちょっと待ってて・・・」

鈴雨は瞳を閉じ

風に話し掛けました

そして静かに瞳を見開き

「大男らしいよ？」

・・・気を付けて、この近くに居るらしい」

鈴雨のその言葉に

残りの二人は警戒心を強めました

第十五話

薄暗い森で一羽の鴉が鳴き始め

それを筆頭に沢山の鴉が鳴き始めた

次の瞬間、鈴夜が持っていた短刀を茂みに投げつけた

「誰だッ!!」

「うわああああ」

情けない声と共に茂みから飛び出して来たのは

鋭い眼付をした大柄な男だった

怯えている彼に鈴雨は容赦なく長刀を突き付けた

「ひい!!」

「鈴雨、鈴夜!! もう一つ気配が近づいています!!」

ビシュッ

風を切り茂みから鋭く尖った木の枝が飛んで来た
その木の枝で鈴夜の頬が切れた

「その君達、その人に何をやっているの？
・・・離しなよ」

茂みから出て来た男は重い殺気を纏っていた

「クスクス・・・そんな殺気が私達に通用するとも？」

「お前は誰だ、離すのはそれからだ」

「また面倒なのが来た・・・」

鈴雨は大男に刀を突き付け

鈴音と鈴夜は殺気を纏う男に刀を向けた

「う・・・っボ、ボク達は、森のか・・・みんなだ」

鈴雨に刀を突き付けられながらも懸命に答えた

「ちよっ！そんな簡単にただの人間に言っただけなの！？」

「ちょっと待って下さい」

「僕達、言っとくけど人間じゃないよ？」

「は？」

間拔けな声が森に響いた

第十六話

「ふーん・・・つまりは君達も神なんだ」

その後、互いに説明し合い害が無い事を確認した
その間も、大男は震えていた

「その方は森の神なんですね」

「そうだよ！それで俺は森の神の守護者」

「守護者？」

守護者という聞きなれない単語に一同は首を傾げた

「うーん、守護者ってのは要するに護る者ってことだな」

「そのまんまじゃねーか」

「アハハ！俺だって詳しくなんて説明出来ないし！！」

胸を張って言うその姿に神ノ兄弟は呆れ顔だった
その中でも鈴雨はどうでも良いといった感じだ

「ねえ・・・なんで守護者が居るの？」

「知らないの？各神にはそれぞれ掩護したり身の回りの世話をする
守護者が居るんだよ」

「ふーん・・・」

「俺等には居ないが？」

「双子、ましてや三人兄弟なんて異例だからね」

「三人も居れば大丈夫、って判断ですね」

「そゆこと」

森の神の守護者と名乗る男は
初めとは別人のような明るさだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5617m/>

神ノ鈴

2010年10月19日09時47分発行